

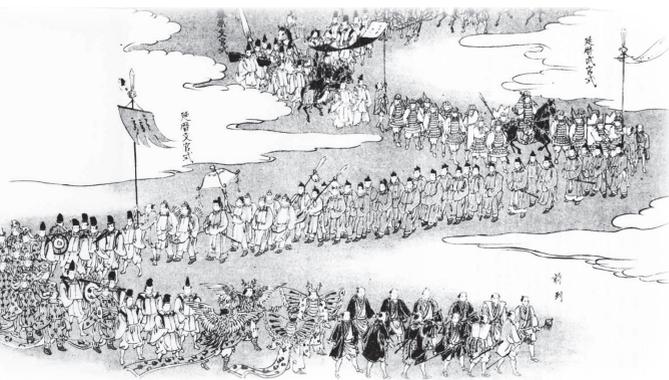
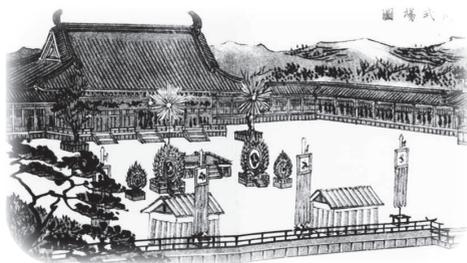
2023.9

秋冬

No.117

思文閣出版

鴨東通信



◆ 日常語のなかの歴史 30

◆ ごとうち【御当地】

◆ 篠崎佑太

◆ ていーたいむ

◆ 通史なき時代をどうとらえるか

― 撰閲・院政期研究を読みなおすの刊行に寄せて

◆ 有富純也

◆ 佐藤雄基

◆ 研究史の世代間共有について

◆ 大島真理夫

◆ エジソンのキネトスコープ『京都祇園新地芸妓三人晒布舞ノ図』の謎

― 『近代京都と文化』伝統の再構築』こぼれ話

◆ 富田美香

エッセイ

◆ 『戦時下の〈文化〉を考える

― 昭和一〇年代〈文化〉の言説分析

◆ 刊行に寄せて

◆ 松本和也

◆ 知行論からのささやかな展望

◆ 高野信治

◆ ミレニアル世代の研究レシビ4

◆ ロシア帝国仏教の偽史言説のかなた

― 『兄弟』としてのミハイル・ロマノフとトルハチ

◆ 井上岳彦

◆ 史料探訪 78

◆ 『ウエブスター大辞典』を抱え持つ三宅良齋

― 東京大学総合研究博物館蔵

◆ 『三宅一族コレクション』より

◆ 西野嘉章

有富純也（成蹊大学教授）・佐藤雄基（立教大学教授）編

摂関・院政期研究を読みなおす

二〇一三年一〇月刊行予定 A5判並製・四〇〇頁／定価五、〇六〇円

摂関・院政期とはどのような時代か？

古代から中世への移行期であり、双方の研究者が研究を蓄積しているものの、近年は両者の対話は十分にできておらず、議論が深まっていないのではないか。それゆえ、何が最新の研究成果で、どこに議論の余地があるのか、外からは見えにくくなっている。

こうした問題意識のもと、古代・中世を専門とする中堅・若手の研究者が、それぞれの専門から研究史を振り返り、混沌とした研究状況を整理して、研究の最前線と展望を示す。

【目次】

総論

（有富純也・佐藤雄基）

第I部 社会・国家の変化

第1章 平安中後期の国家財政（神戸航介）

第2章 古代の集落は消滅したのか
（有富純也）

第3章 荘園制成立史研究と摂関期の荘園研究
（手嶋大祐）

第4章 「本所法」とは何だったのか
— 院政期と鎌倉期 —
（佐藤雄基）

第5章 治承・寿永の内乱から生まれた鎌倉幕府—その謙抑性の起源
（木下竜馬）

第II部 東アジアと政治文化

第6章 摂関・院政期仏教と東アジア
（手島崇裕）

第7章 「国風文化」はいかに論じられてきたか
（小塩 慶）

第8章 天皇の二面性とその分化明確化過程
（井上正望）

第III部 貴族社会と新たな身分

第9章 摂関家はいかなる権力であるか
— 院政期の「権門」と「家」 —
（海上貴彦）

第10章 摂関・院政期の女房と女官
— 階層秩序を中心に —
（岡島陽子）

第11章 技能官人編成試験
— 「官司請負制」以後 —
（鈴木 蒼）

第12章 武士成立史研究の成果と課題
（藤田佳希）

第13章 中世的身分のはじまり
— 種姓観念と家格 —
（金 玄歌）

研究者名索引

表示価格は税込

日常語のなかで、

歴史的語源や

エピソードを取り上げ、

研究者が専門的視野から

ご紹介します。

日常語の なかの歴史 30

いこうち

御当地

「ご当地キャラクター、ご当地グルメ、ご当地アイドルなど……昨今の世の中には「御当地」があふれている。これらは、その地域の特産品や文化、観光資源などをアピールし地域振興を図る目的で設定される。この時、「御当地」には「他の土地の人が相手の住む土地へ行ったとき、相手を敬ってその土地をいう語」（『日本国語大辞典』）といった程度の意味がある。ところが、江戸時代の「御当地」は意味が異なる。

前述の意味で使う場合もあるが、史料に出てくる「御当地」は多くの場合「江戸」を指す。

例えば、「当四月日光山為幣使園宰相中将下向、御当地通行之砌、私方え立寄候而も不苦儀可有御座哉」（『甲子夜話』五、東洋文庫、意訳…今年の四月日光例幣使である園宰相中将が江戸を通行する時、私（松浦静山）の元へ立ち寄ってもよろしいでしょうか）といった具合である。ある一方を指す「当地」という言葉に、接頭語の「御」が付くことで尊敬の意味が付き、將軍の拠点すなわち「江戸」となるわけである。

では、將軍が江戸を離れば「御当地」も動くのだろうか。幕末の政治状況に対応するため上洛した十四代將軍徳川家茂は、慶応元年（二八六五）閏五月から翌年七月に死去するまで大坂城を拠点にした。この時、先の説明に従えば大坂が「御当地」となるはずである。ところが、同時期に幕府から出された触を見ると大坂は「当地」とされ、あくまで「御当地」は江戸だとわかる。幕末の政治状況のなか、大坂はじめ畿内の重要性が高まることは間違いないが、あくまで將軍の拠点、すなわち「御当地」は江戸だったのである。

明治維新を迎えた後、新聞紙上で確認する限り江戸・東京を指す「御当地」は明治二〇年代ころには姿を消す。現代のような意味で「御当地」が新聞紙面に登場するのは、戦後一九六〇年代に入ってからである。江戸時代から一五〇年を過ぎて、現代では自分たちの出身地や縁のある地域がそれぞれの「御当地」として親しまれているといえるだろう。

（篠崎祐太・宮内庁書陵部図書課宮内公文書館研究員）

ていーたいむ

大きな物語なき時代をどうとらえるか

『撰関・院政期研究を読みなおす』の
刊行に寄せて

ありとみじゅんや
有富純也

(成蹊大学教授)

さとうゆうき
佐藤雄基

(立教大学教授)

古代史と中世史の中堅・若手研究者が、撰関・院政期の研究史を振り返り、それを踏まえて新たな研究を切り拓くという趣旨の論集、『撰関・院政期研究を読みなおす』が刊行されます。編者のお二人に本書を企画したきっかけや成果を語っていただきます。

■なぜ研究史を読みなおすことにしたのか

——まず本書がどのように企画されたのかを聞かせてください。

有富…もともとは、撰関・院政期についての研究書を古代史・中世史の若手と一緒に読もうという読書会から始まりました。

佐藤…最近、研究入門や研究史整理の本が結構増えていますよね。古代は大津透編『律令制研究入門』（二〇一二年）くらいですが、中世だとたくさん出ています。それを読めば、過去の研究を知らなく

ても最先端に行けるようになっていくわけですが、そこに少し違和感がありました。たとえば、冷戦が終わって、マルクス主義歴史学は間違っていたから、その時代の研究はもう読まなくてもよいと思っている人もいます。撰関期だと、九〇年代にあまりマルクス色のない議論が続々と出て、それが今の通説を成しているわけですが、だからといって現代歴史学はそこから始まっていく、としてしまってもよいのかと。

有富…古代史側からすると、撰関期の研究は九〇年代に中央集権を重視する大津透さん、朝廷の統制力は弱体化していたと考える吉川真司さんの研究が出て、お二人の相反する議論以降も多くの研究がでたのですが、あまり中世史研究者とコミュニケーションをとる人がいなかったように感じます。吉川さんは中世を意識し

て研究をされていたとは思いますが。だから、僕は中世史の若手と一緒に平安時代の勉強をして次の研究を作っていきたいと思っています。

佐藤…読書会の初回は二〇一六年で、保立道久『中世の国土高権と天皇・武家』（二〇一五年）を読みました。最初に読んだこの本が古代・中世に跨るもので、かつ戸田芳実など戦後歴史学を踏まえたものだったので、この時代の古典をきちんと読もうという流れができたのだと思います。次は戸田芳実『日本領主制成立史の研究』（一九六七年）を読み、その後は工藤敬一『荘園公領制の成立と内乱』（一九九二年）、大山喬平『日本中世農村史の研究』（一九七八年）、安良城盛昭『日本封建社会成立史論』（一九八四・九五）のほか、上島亨『日本中世社会の形成と王権』（二〇一〇年）など新しい本もとりあげ、年に二、三回程度、有志が一〇人ほど集まって二〇一九年まで続いていきました。

有富…特に古典の読書会なんて、若手は興味ないかな、などと思っていました。意外に多くの人に参加してもらったし、議論も活発でした。二〇二〇年になって、いろいろと読んできて考えたこともあるので、それを本にしたいと考えるようになりました。

■新規参入しづらい時代

佐藤…そもそも撰閣・院政期は学部生が卒論で取り組みにくいです。よね。例えば奈良時代だと、六国史や律令があるので、それを解釈して卒論を書くというのは比較的やりやすいと聞きます。

有富…鎌倉時代だと『吾妻鏡』『中世法制史料集』がある。軸にな

る史料があるから卒論を書きやすい。でも撰閣・院政期だと『御堂閨日記』『小右記』などの古記録があるけれど、難しくて手を出しにくいイメージがあるのだと思います。現代語訳が出るなどして、アクセスしやすくなっているのですが。

佐藤…ただ、八〇年代くらいまでは、どう古代が崩れていき中世になるかという関心からかなりの研究者が参入していて、『平安遣文』が刊行されていたこともあって研究が盛んでした。その頃に佐藤進一とか戸田芳実とか、読書会で読んだような現在のベースになる学説が生まれているのです。その後、九〇年代に大津さん、吉川さん、その少し前から下向井龍彦さんの研究が出て、若い人から見ると巨人がバトルしているイメージがあつて、余計に参入しにくいのもかもしれませんね。

有富…僕は、二〇〇八年に思文閣出版からでた『室町・戦国期研究を読みなおす』を見て、時代は全然違うのだけれど、当時の若手が研究史を踏まえて新たな研究を切り拓こうという本を作ったのがすごく格好いいと思っていたので、そういう本を作ろうと思ったのです。まず読書会に主要メンバーとして参加していた木下竜馬さん、海上貴彦さんを誘い、四人だけというわけにもいかないから、他にも声をかけようということになったのです。

■執筆に向けた研究会

——メンバーはどのように集めたのですか？

佐藤…研究史整理をするからにはテーマをバランスよくとは思いますが、目にとまった範囲ではありませんが、やはりいい論



佐藤氏

文を書いている人を誘いました。

有富…そう、世代は二〇代後半から三〇代。二、三本論文を發表して、これはいいなという人を選んだつもりです。

佐藤…だから結果的に網羅的ではないのです。例えば儀礼関係など、拾えていないテーマはあります。

——メンバーを見てまず思った

のは、東西の研究者がバランスよく入っているということでした。**佐藤**…実はバランスを取ろうとしたつもりは全然ありません。事情を知らない人が見ると、東西でバランスを取ったように見えるかもしれませんが。

有富…面識のない人もお誘いしました。きっと何人かには断られると思ったのですが、誰も断りませんでしたね。

佐藤…二〇二〇年からは執筆に向けた研究会を年に四回くらい行いました。コロナ禍の真っ只中だったので不安もありましたが、Zoomを使えば日程調整をするだけでよかったです、問題なく運営できました。手島崇裕さんと金玄耿さんは韓国におられたし、僕もイギリスにいた。もしZoomという選択肢を知らなかったら、同じようにはできなかったでしょうね。

有富…はじめ京大出身の方は初対面が多かったのですが、全然喋らない人もいるかもしれないと恐れていたのですが、思ったより討論

も盛り上がりました。

■見えてきた撰関・院政期研究の特色

佐藤…今回の本は、いま若手が何を考えているかを書いてもらうことを優先したので、『室町・戦国期研究を読みなおす』を読んだ感じのように、いわゆる戦後の通説を共通の仮想敵にして戦っていくような共同研究性はなかったと思います。そもそも撰関・院政期は共通の仮想敵が見えづらい時代なのかもしれません。

有富…特に古代史の若手は、仮想敵、例えば大津さんも吉川さんも意識せず研究しているというのがよくわかりました。

佐藤…先ほど述べたように、中世史は研究史の整理がブームになっていて、そこでは階級闘争史観とか、佐藤進一さんとか、仮想敵が必ず出てくるのですが、平安時代の研究者は違っていると感じました。

有富…でも院政期だって、いま誰が仮想敵かといわれるとわからないよ。

佐藤…たしかに九〇年代に荘園制研究で川端新さんの（荘園の成立において国家による上からの編成を重視する）立荘論がでてからは、それで通説化している印象があります。もちろん立荘論に対して、在地の動きを重視しなければならないという批判はありますが、必ずしも新しい院政期の時代像を示していないように思います。

有富…立荘論の議論をしている人たちに、自分は院政期の研究者だ、という意識はないと思うな。

佐藤…荘園史や地域社会論だと院政期にこだわらない広がりがある

りますよね。

あと、最近は撰閔期の研究という朝廷関係の話が多くて、武士研究は少なくなりました。そのなかで、金さんと藤田佳希さんは、古代史的な視点から貴族社会研究で重視されている身分意識の問題を組み込んで、武士にアプローチして面白く思います。古典的なテーマでも、いまの研究の潮流を踏まえながら、新しいアプローチができるのですね。

ところで、例えば手嶋大侑さんが撰閔期の荘園を担当しましたが、院政期で立荘とか荘園制とかをやっている人を入れられると比較ができて面白いと思っていながら、それはできませんでした。でも一方で、小塩慶さんの国風文化と手島さんの仏教史の議論で従来の文化を守りながら、海外から入ってくる文化は二重構造の外側で吸収するという共通の構図が見えたり、岡島陽子さんの女官研究と鈴木蒼さんの男性官人の研究、海上さんの撰閔家の研究



有富氏

など別々のテーマで研究史も違うのだけれども、議論の方向性で似ているところが浮き彫りになったりした点は面白いです。**有富**…これを読めば、いまホッとなテーマが何かがわかる本にはなったよね。単に網羅的に先行研究を集めたわけではなくて、執筆者ごとに自分の視点で研究史を紹介できていますから。

佐藤…いま振り返ってみると、書きやすいテーマとそうでないテーマはありましたね。やはり九〇年代に大きな画期があったのですよ。大津さん、吉川さん、それから川端さんの立荘論に川合康さんの鎌倉幕府成立論……。その時代に議論がされたテーマは振り返りやすいのだと思います。

有富…そうかもしれない。金さんが担当した身分論は研究史を振り返ろうとするとかなり古くなってしまつて、九〇年代以降あまり議論されていないから苦労したと思います。

■撰閔・院政期とはどんな時代か

——「総論」では、時代像を提示することはあえてせず、それは読者に委ねることにされました。この機会に、編者のお二人が撰閔・院政期をどう捉えているのかをうかがえますか。

有富…大津さんと吉川さんの違いは、中央集権を重視するか、朝廷はある程度支配を放棄していたと見るかに一つのポイントがあるのだけれど、それに対して本書なりの意見をはっきり言えたらよかつたと思います。でもそれは十分にはできませんでした。

それとは少し違う議論をすると、自分の章でも書いたのですが、撰閔期は人が住みにくい社会になっていたのでろうなと思います。一応、人が住むところはあつたようですが、古代からの集落は消滅したといわれています。それがなぜなのかははっきりしないのですが、最近では気候変動が注目されています。やはり奈良時代とか九世紀に比べると、もう国家は支配をする気がなくなつていて、税金をある程度取れば良いと考えている時代なのだと思います。

ます。だからいまの時代と一〇世紀の始まりあたりは似ている気がします。ほとんど非正規雇用が多くなっていくところとか。

佐藤…僕は院政期を研究していて、国家的編成を重視する立荘論には違和感を覚えることがありました。実際には、社会の中の変化を下敷きにして荘園ができていったのではないかと考えていました。改めて摂関期から通してみると、やはり院政期に新しい国制が生成したのは確かで、それを評価する必要があると思っっています。

日本の歴史の中で大きな国家変革というと、大化の改新とか、秀吉、家康の統一政権とか、あと明治維新ですかね。どれも国際的契機があったと思うのです。秀吉の時期も、明清交代やイベリアン・インパクトがあり、朝鮮出兵がありました。そういう点で言うと、院政期には対外的な危機があったわけではない。なぜそのような中で変化が起きたのか。

律令体制は七世紀の終わりにできて、長く見ても九世紀には変容しているし、幕藩体制は、一七世紀に固まって一九世紀にはもう制度疲弊を起こしている。ところが荘園制あるいは権門体制は、一二世紀頃にできて、一五世紀までだから存続する結構な長期体制なのですよね。しかも明確な制度設計がそもそもあるわけでもなくて。僕自身の考えとしては、院政期中世的なものが固まるというよりも、院政期の流動的な変化が、最終的に鎌倉時代に固まっていく（そして院政期が振り返られていく）という風に見えていますけど、いずれにせよ、あの時期にどうしてそういう動きが出てくるのかわからないというのが正直なところです。

もう一つ未だにわからないのは、なんで武家政権ができるのかです。昔は、在地領主が成長していった、古代の集落が消滅した後、再開発を行った人たちが富を蓄積して地方政権を作っていくという、分かりやすいストーリーがあったのですけど。中国や朝鮮半島と比べて、日本史が独自色を出してくるのが中世という時代代と思うので、それが古代国家のダメさ加減の果てにできてしまったデイストピアなのか、その中で新しいものを作ろうとした努力の産物なのか、うまく説明したいです。

有富…僕のように古代から地域社会を見てみると、佐藤君とはちよつと違っていて、摂関期と院政期以降はあまり変わっていないというイメージです。もちろん、院とか幕府が出てくるのは大きな変化で、主導する政治家は変わるけれども、社会の構造は一〇世紀後半になるともう固まってしまって、中世のある時期まではそのままというイメージです。

佐藤…中世って院、幕府、室町殿などが次々と出てきて、上層部を見ていると、本当に変化が激しいのですよ。かつては社会の変化（成長）の反映だと思われていた。ただ、目線を下げていくと、社会の基礎は変わっていない。高校の教科書的な、権力者の所在地で区分している時代区分とはたぶん違う時代像が出てくると思います。日本史の場合、権力者中心の歴史像になっていて、我々自身もそれに縛られている部分があります。そう考えると、歴史の見方って本当はもう少し考え直さなければいけないと思うし、この論集でそれを考えないといけなかったのかもしれない。終わってから改めてそれに気づいたという感じです。

古代と中世に時代区分があるのかも問題になってきます。中世は古代国家が腐敗した姿で、太閤検地まで新しい国家体制はできなかったという議論が昔からあります。在地領主制とか奴隷から農奴へといった進歩史観的な戦後歴史学の枠組みを外すと、じつはいまいち画期が見えないのですよ。

古代と中世の間には、「移行期論」がなくなっているのではないのでしょうか。中世と近世にも、近世と近代にも、たとえば明治の途中までは江戸時代的なものが残っていたとかいう移行期論があって、それなりに研究者の層もあるのです。撰関・院政期も、戦後のある時期の研究までは、平安時代を広く捉えて、九世紀から一世紀にかけて、奴隷制から農奴制へとか、在地領主の成長とかを議論していたと思うのです。でもいまは、古代・中世移行期といった場合、それが撰関期を指すのか院政期を指すのかさえ茫然としていて、移行期研究がない気がします。そうすると、古代・中世の時代区分の難しさと、移行期研究の難しさ、撰関・院政期研究の難しさ、それらはリンクしているというのが、うっすら見えてきた気がしますね。

■撰関・院政期研究のこれから

本書は、これから研究に取り組む人のための入門書を目指しています。最後に本書に託した想いを聞かせてください。

有富…総論を読めば、戦後からの研究の流れが大体わかるようにしたつもりなので、まずはそれを読んで、なんだか面白そうだと思うっていただいて、個別の章や参考文献にあがっている研究を

読んでみる、そういう風に読み進めてもらいたいですね。これを学部生や修士課程の学生さんが読めば、自分のオリジナリティーを作るきっかけになるようなものを提示できたと思います。

撰関期には撰政・関白はいるけれども、院政期にならないと「撰関家」は出てこないなど、専門外の人にとっては知らないことが多いと思うので、ぜひ、そういうことも面白がってほしいです。この本を読むと、高校で習う政治史中心のイメージが大きく変わると思います。

佐藤…文化と外交って、教科書にはほとんど出てこないのですよ。第Ⅱ部の小塩さんと手島さんのところは、この二〇年でかなり大きく研究が進んで、まだ一般に還元されてない部分だと思うので、これがまとまったのはとくに大きいと思います。「国風文化論」や「対外関係」について成果をまとめた本は出ていますが、それだとそのテーマに関心のある人しか手に取らない。そうではなくて、撰関期・院政期という時代像を考えるなかのテーマとして、対外関係とか文化を位置づけたものは、意外となんか気がしますね。

あと、この本を読んでというだけではないのですが、これからの研究への期待として、院政期の通史が出て欲しいです。まず誰の本を読もうって考えた時に、あまりないという声を聞きます。若い人が仮想敵にできるような通史が出て欲しいです。

有富…今回の研究史整理を踏まえて、社会に還元できるような、分かりやすい撰関・院政期像が新たに出てくることを期待したいと思います。

研究史の世代間共有について

おおしままゆりお
大島真理夫

筆者は一九五〇年生まれ、一九六九年に大学へ入学し、まもなく七三歳になる。大学へ入学した頃、七〇代の名誉教授といえ、雲の上の大先生というイメージであった。現在、自分が表面的にはそうなっているわけであるが、過去のイメージと現実の自分の落差に愕然とせざるを得ない。自分がふがいないのか、過去のイメージが虚像であったのか、それはともかくとして、五〇年という時間が経過したことは動かしようのない事実である。時代は変わり、学問も変わった。

いつの時代、どの学問分野でも、初学者は、その先生世代や先輩世代が作り上げた学問体系の勉強から始め、自分が満足できないところを掘り下げて、やがて先生や先輩たちを乗り越えていく。先生世代、先輩世代の問題関心やテーマ設定の仕方については、自分の学問的格闘相手であり、完全ではないとしても、理解しているつもりである。そういう格闘をしながら時代が推移し、自分が七〇代になると、先生世代はもちろん、先輩世代も鬼籍に入り、あるいは研究を終了している方が多くなり、見渡せば、活動しているのは自分より下の世代ばかり、という状況に気づく。そして、

下の世代の研究成果は、テーマ設定はわかっても、その問題関心はなかなか理解できない。世代の違い、ということを感じてしまう。

少し前のことであるが、そんなことを若手の明治維新研究者にこぼしたところ、小林和幸編著『明治史研究の最前線』（筑摩書房、二〇二〇年）を推薦されて、読んでみた。総勢三一名が担当分野・テーマの「研究の最前線」を論じた好事者である。そこで「維新史研究」を振り返った久住真也は、戦後の維新史研究をリードした遠山茂樹（一九一四～二〇二二）や田中彰（一九二八～二〇二二）世代の研究について、「以上のような諸研究は、現在の学生が参照するにはマルクス主義の理論や研究の時代背景を把握していないと簡単に理解できないという特徴がある。筆者のようにベルリンの壁が崩壊した一九八九年に大学に入学した世代と、二〇年ほど年配の研究の間にも、その理解の程度に大きな差があるというのが実感である」（同書、一九頁。一部改変）と書いた。久住がなぜ二〇年という世代差を持ち出したのかわからないが、前述のように私はちょうどその世代である。「理解の程度に大きな差がある」といわれ

た世代として、何か責任を感じてしまった。

他の世代の研究を理解することが難しいのは、普通は明示的に書かれない、研究の背景や原点にある問題関心が、同世代には暗黙の了解事項になるのに対し、他世代にはわかりにくい、という事情があるかもしれない。近刊の『近代日本経済の自画像』（思文閣出版）では、幕末開港から二〇〇八年までを八期に分け、全体を「西洋がモデルであった時代」として描いた（出版案内）参照。そして、各期の自画像の中心な担い手としての青年論、世代論にも踏み込んだ。一〇代後半から二〇代前半の青年期は、時代の空気を呼吸しながら、白紙状態の精神が世界観や歴史観を刻み込み、自国認識、自国の自画像も同時に形成される。同じ時代の空気を呼吸していても、世代によって、感じる空気の温度は異なる。青年期の感覚は、しばしば沸騰する。そして、その記憶は長く消えない。時代が変わっても、人間の頭脳はコンピュータではないので、新しい情報を上書きして古い記憶を更新するということは簡単ではない。世代間ギャップが生まれる原因である。

筆者の一〇代後半から二〇代前半は高度経済成長の後半期であり、青年期を高度成長国の中で過ごした世代である。先輩世代（青年期は敗戦直後）、先生世代（青年期は昭和戦前・戦中期）が構築した「戦後歴史学」とか「市民派社会科学」と総称される学問体系を学ぶことから勉強を始めた。それらは巨大な学問の山脈であり、簡単に登ることはできなかったが、そこで描かれる著しく暗い日本史像・日本社会像に違和感を持ち続けた。

今回、青年論、世代論として整理してみることによって、先生

世代、先輩世代の苛酷な、異常と言える青年時代に思いをはせることができたように思っている。筆者は、子供時代、親世代や祖父母世代から、「お前たちは戦争のない平和な時代に生まれて幸せだ」「食べ物に苦労しないですむ時代に育つてよかった」と言われ続けた。おそらく、私の世代に共有される記憶であろう。急に世代が上がるが、日清戦争前後に生まれ、日露戦争は小学生、日本の国力上昇過程しか知らずに育った世代は、徳富蘇峰によって「大正の青年」と名づけられ金持ちの若旦那と皮肉られた。彼らはデモクラシーやリベリズム、マルクス主義も取り込む自由な青年期を過ごした。これらに対し、先生世代は、青年期には思想統制が強まり、戦争が激化すると学徒出陣で多くの同期生が命を落とす時代、先輩世代は、「軍国少年からマルクス・ボーイへ」という言葉が象徴するように、精神的免疫力のない少年時代から青年時代に価値観の一八〇度転換を体験する。講座派マルクス主義が、「魔力のように作用した」（望田幸男）理論によって批判しても否定しきれない事実認識のおそろしさをもっている（伊東光晴）という述懐は、真にわかっているか自信はないが、理解できるような気がする。同時に、この世代が構築した学問の歪み（著しく暗い日本史像、日本社会像も、無理もないという共感はあるが、正さなければならぬ）と思わざるを得ない。

「研究史の世代間共有」は簡単ではないであろうが、拙近著が、各世代の「研究の時代背景」「原点にある問題関心」を明らかにし、少しでもそれに貢献できれば幸いである。

〔大阪市立大学（現大阪公立大学）名誉教授〕

エジソンのキネトスコープ

『京都祇園新地芸妓三人晒布舞ノ図』の謎

富田美香

—『近代京都と文化—「伝統」の再構築—こぼれ話

今夏刊行した高木博志氏編著の『近代京都と文化—「伝統」の再構築』に、京都の花街・祇園を描いた大正から昭和初期の無声映画について寄稿した。このテーマは二〇〇〇年程前に調査したことがあり、やり残していた明治期の調査を行って、歴史的に概観してみたいと思っていた。ところが、その調査で予想外の壁にぶちあたってしまった。調査は導入部のほんの数行のためだったのだが、自分の中では大きな謎として残り、澱のように溜ってしまっただけなのだ。

その謎とは、動く写真映像として日本に初めて公開された、有名なエジソンのキネトスコープの日本公開題名『京都祇園新地芸妓三人晒布舞ノ図』（別題『日本京都舞妓の布晒扇遣ひの図』原題Imperial Japanese Dance、別英語題Sarashie Sisters、一八九四年）である。本作の成立経緯は、公開当時の『東京毎日新聞』、『時事新報』などで紹介され、その内容は日本映画史の通説ともなっている。曰く、一八九三年のシカゴ万国博覧会の茶店の要員として連れて行かれた京都の舞妓十数名が、都をどりや布晒しを披露して評判となり、キネトスコ

ープに撮影されたというものだ。他方で海外では、被写体の女性三人は、一八九〇年代にブロードウェイの出演記録もあるSarashie Sistersとされる。ただ、彼女らの経歴はよくわからないのだ。

一体、日本公開時の題名と新聞記事は、全くの嘘、偽りだったのか？ はたまた、一九〇〇年のパリ万博のパノラマ館で鳥森の芸妓が、舞を披露した後に一座を組んでヨーロッパを巡業したように、シカゴ万博に参加した芸舞妓もSarashie Sistersとして巡業したのだろうか？ いや、そもそも、京都の芸舞妓が本当にシカゴ万博の茶店に行ったのか？

これらの謎を解明しようと、『海外博覧会本邦参同史料第四輯』（一九二九年）を見ても、茶業組合中央会議所の喫茶店に関する報告はあるが、芸舞妓に関する記述は皆無であり、万博が開催された一八九三年の『日出新聞』を一年間分繰っても、芸舞妓が参加したという記事は見あたらない。

この喫茶店に関する京都での報道（以後、特記以外すべて『日出新聞』記事）は、荷造りした建物と組立担当の大工職工二名が発券する

という一月二六日付記事に始まり、京都から出品する製茶の発送、茶店の調度品、店員は全て紋付羽織袴を着ること、建築資材のシカゴ到着、茶店の立地と建築工事の進捗状況など、開会まで逐一報告されており、京都での関心の高さがわかる。開店後の六月九日付記事では、給仕を男子から女子へ一新することが決まり（隣フランス料理店への対抗策らしじ）、サンフランシスコ在留の日本人から「可成美貌にして品行は必ず方正ならざる可らざる事、多少の英語を解せざる可らず、確實なる身元保証人を要す」を条件として募集する旨が報じられている。その後の茶店は、日々「二千人以上」（『読売新聞』七月三日付）という繁盛ぶり、婦人館付属の小児館落成開場式や、スペイン内親王、ハリソン前大統領など要人への日本茶の饗応も行ったようだが、これらの饗応役にも芸舞妓らが登場した記述は全く見あたらない。

他方で、博覧会場で羽二重織の技術を披露するために西陣組合から選ばれた「羽二重織工女」の渡米や、博覧会の売店の番人として渡航した四条通の人形店の娘が、帰京後洋服ばかり着て闊歩している旨まで報じられており、芸舞妓が京都からシカゴ万博に行つたならば、報道されないわけがない、と思わざるを得ない。つまり、芸舞妓が喫茶店の要員として京都から連れられて行つた可能性は限りなくゼロに近いのだ。

気になるのは、「醜業嫌疑婦女の解放」と題した四月一九日付記事で、神戸で周旋人の口車にのつて博覧会が開催されるシカゴへ出稼ぎに渡航しようとした女性五名と雇い主の男一名が、京都で警察につかまり、放免された旨の報道と、その翌日に「都踊り出

品の計画」と題して、京都の山師連が莫連女を伴って都をどりをシカゴ万博に出品する計画をしていると警察が注視している旨の報道があることだ。「山師」と「莫連女」以外は、日本映画史の通説と合致する。さらに八月四日付記事では、日本品の販売店コーナーで、日本茶の販促用に喫茶店もしくは休憩所の設置に強引に着手したという人物が報道されており、民間人による茶店もできた可能性もある。そして、この販売店コーナーの一三〇人ほどの売り子の一人に、後に博覧会王、または国際的山師とも言われた櫛引弓人がいたという（『実業の世界』一九二〇年五月一日号）。この櫛引が在籍した東京の新居商會が、後にエジソンのヴァイタスコープを購入して神田で上映したことは田中純一郎の『日本映画発達史 I 活動写真時代』（中央公論社、一九八〇年）でよく知られているが、同書で田中は、新居商會の柴田忠治郎と村上泰三が、シカゴ万博に茶店を出して京都祇園の芸妓に喫茶の接待をさせたと書いている。こうなると、「山師連が莫連女を伴って」一種の都をどりを売店の茶店で披露した可能性もあり得る。とはいえそれも、点と点をつないだ推論でしかない。

最大の謎は、邦題に「京都祇園新地芸妓」を冠した理由だが、この題が当時の新聞記者や観客に拔群の訴求力を発揮したことだけは明白だ。漱のように溜つた謎の前に、自身の非力を嘆きつつ、たとえ彼女らが祇園と全く無縁だったとしても、日本映画史の幕開けともいえる本作の題は、広報上の虚偽ではなく、英題と映像からそう信じてつけられた題であつてほしいと願う。

『戦時下の〈文化〉を考える——昭和一〇年代
〈文化〉の言説分析』刊行に寄せて松本和也まつもと かつや

夏は年々暑くなっていくようで、七月、すでに盛夏と呼ぶべき暑さだった。ふと、京極夏彦の『姑獲鳥の夏』を読みたくなった。坂東真砂子『盛夏の毒』を読んだからかもしれない。十数年ぶりに再読した『姑獲鳥の夏』、(詳細は省くが)「見えているはずのものが」見えていなかった」という機制には、相変わらず説得力があり、妙な生々しさすら感じた。

こうした機制は、ひろく考えれば、研究にも通じるように思う。「見えているはずのものが」見えていなかった」ことに気づくことができれば、それを問題領域として「発見」したことになるだろう。私もそのようにして、拙著『戦時下の〈文化〉を考える——昭和一〇年代〈文化〉の言説分析』に結実したところの問題領域を発見し、ようやくまとめることが叶った。もちろん、別の視座からすれば、私こそが「見えているはずのものが」見えていなかった」ということも十分あり得る。それでも、こうした宮為(の反復)を通じて、研究はひろがり、つづいていくのだと思う。

数年前の冬、はじめて桂離宮を参観した。周知のように、昭和戦前期、ドイツ人建築家であるブルーノ・タウトによって桂離宮

は「発見」(再評価)された。手元の文庫本から引用すれば、「桂離宮は、日本の最終にして最高なる建築的発光点であると云える」(森偽郎訳『日本文化私観』講談社、一九九二)といった具合である。ヨーロッパ人から見た日本文化とは、ヨーロッパ人によって価値づけられた日本文化ということでもある。当時、坂口安吾が「日本文化私観」(『現代文学』一九四二・二)を書き、「僕は日本を「発見」する必要だけはなかったのだ」と応じる一コマもあった。私自身は、とりわけ桂離宮に明るいわけではないが、それでも、長らく桂離宮を参観してみたいとは願ってきたし、また、戦後の和辻哲郎らの論及や石元泰博の写真を、全く知らないというわけでもない。

そうした意味に取り巻かれた桂離宮を、空気の乾いた、寒い日に観た。こちらから、崇高な雰囲気に入ろうとする心持ちもあった。はじめて目にする桂離宮は確かに見事で、ガイドの方が語る由来によってその重みはいや増す。それでも、こたえあわせをしていくような妙な感覚はつきまとうた。それをすぐれた日本文化だと位置づける国内外の言説/写真の堆積。そこから逃れることは、難しかった。まさに『姑獲鳥の夏』である。しかも、私には

「見えていなかったもの」が何かすらわからないままだった。

昭和戦前期における日本(文化)のシンボルといえ、富士山だろう(もちろん、今でもそうなのだろうけれど)。今回、拙著のカバーには川瀬巴水《三保の松原》を使用した。この作品には、松原にくわえて海(白波)や富士山も描かれている。本歌とも言うべき歌川広重《駿河三保の松原》もあり、おぼろげにでも記憶していれば、手前に松原が、遠景に富士山が浮かぶはずだ。そうであれば、この時、「見えていないはずのもの」見えていた」ということになる。あるいは、見えずぎていて、川瀬巴水の《三保の松原》が見えにくい、ということすらあるだろう。いずれにせよ、対象それ自体を見ることが、やはり難しい。

詳しい方も多いと思われるが、少しだけ川瀬巴水(二八八三―一九五七、本名文治郎)について確認しておく。一九一八年、伊東深水の木版画《近江八景》によって版画に興味を抱いた川瀬巴水は、知遇を得た渡邊版画店・渡邊庄三郎とともに新版画に取り組む。当時流行の創作版画運動(全工程を作者が担う)とは別に、「新版画」とは画家・彫師・摺師による三者分業を軸に、伝統的の木版画技術を活かした新時代の浮世絵版画である。

一九二〇年、川瀬巴水は最初の連作『旅みやげ 第一集』を完成させ、以後も日本各地に取材した近代風景版画を数多く発表し「昭和の広重」とも称されるようになっていく。こうした川瀬巴水の画業は、当時も今も、「見えていなかった」日本各地の日本らしい風景を、それとして見えるようにするものだとはいえる。

目下、全国巡回中の展覧会「川瀬巴水 旅と郷愁の風景」(S O

MPO美術館ほか)の紹介文には、「近代化の波が押し寄せ、街や風景がめまぐるしく変貌していく時代に、巴水は日本の原風景を求めて全国を旅し、庶民の生活が息づく四季折々の風景を描きました」(石川県立美術館ホームページより)とある。「日本の原風景」を描くことで、近代化以前の日本を見えるようにするという営為は、昭和戦前期の地方文化運動と重なるところもある。しかも、この展覧会各会場では、かのステイブ・ジョブズ(アップル創業者の一人)が川瀬巴水の熱心な収集家であったことが紹介される。このことも川瀬巴水(の作品)を、より日本らしいもの——海外に誇る日本文化へと価値づけていくだろう。

最後に、三保について、拙著に関わる補足をしておく。文学座の創設者、戯曲家として著名な岸田國士は、一九三八年、『暖流』という新聞小説を発表した。(詳細は省くが)恩師に託された仕事を全うしながらも挫折した主人公は、ラストシーンで三保を訪れる。三保の海(自然)に「優れた民族を生む恩寵」を感じる主人公は、それを励みに再起を図ろうとする。この時、岸田に何が見えていたのか。一九四〇年、大政翼賛会文化部長に就任した岸田は、その後の(文化)言説を牽引していった。太平洋戦争の行方(帰結)が「見えていなかった」歴史の渦中で、文化人には何が見え/見えていなかったのか。そんな想像をしながら、私は『戦時下の(文化)を考える』を書いた。

(神奈川大学教授)

知行論からのささやかな展望

高野信治

知行ちぎょうという言葉をご存じだろうか。もともとは職務執行の意味がある。「知行国」という平安時代の制度は国を与えられ国務を執り行うものだが、武士が展開する時代となり実質的な土地支配をさすようになった。その実効支配が主従関係を結ぶ主君から認められる安堵あんど、新たに与えられた土地は新恩しんおんと呼ばれる。知行としての土地からは収穫物を取得し、そこに統治行為が実現する。知行には、主従の契りを結ぶ武士相互の政治関係、統治者としての武士と民衆との支配関係、土地からの収穫物をめぐる経済関係などの歴史事象を読み解く鍵が潜む。

ところで、近世・江戸時代には知行形態に変化がみられた。それは、将軍が直臣にあたる大名や旗本に与える知行と大名が家臣に与える知行の相違としてあらわれる。前者の場合は実際の土地拝領（大名の場合は所領・藩領、旗本の場合は地頭知行所などと呼称）が一般的だが、後者の場合は土地支給はみられるがそれを採用する藩は限定的となり、米や金銀銭が給禄の趨勢となる。武士のサラリーマン化との比喩は、かかる知行変容の一端を捉えたものだ。本来の知行である土地給付が普通の形態ではなくなり、土地給付は地

方かた知行、米や金銀銭支給の場合は蔵米取くらまいちり、切扶きりかみ（切米取・扶持取ふちどり）などという。近世での知行変容の動向のなか、地方知行の家臣による土地・民衆への支配権限は制約をうけ、それは知行の形骸化とも評され、家臣の大名への従属性の高まりとして藩政確立の主要な指標となる。

ただし地方知行が存続した佐賀（藩）出身の私は、地方知行を「遺制」と評価することに違和感を持った。知行変容のなかでもこの知行形態が存続した歴史的意思是、熟考に値するのではないかと。

日本近世史研究の最前線とは言いがたいこのようなテーマを悶々と考えあぐねていた頃、私とは立場を異にしながらも近世知行制の通説にいささかの思いを持っていた、ジョン・モリスさんと白川部達夫さんから声をかけられ、三人が発起人となって知行制研究会を発足させた。一九九一年のことである。旗本知行や藩家臣（藩士）知行、また様々な地域を対象にする若手の研究者が集って、一三回の研究会を重ねた。その成果がモリス・白川部・高野共編『近世社会と知行制』（思文閣出版、一九九九年）である。詳細

は同書を読みただきたいが、私自身は近世の知行を巡る考察を通じ、行政役人としての性格を強める家臣に対し、本来は戦闘者である武士としてみる立場も重視するようになった。

近世は泰平と呼ばれる平和な時代である。武士である家臣は、戦闘者でありながら、役人としての働きをする。米や金銀銭の給禄は、現在の公務員を彷彿とさせる。しかし、「田禄」「地方」の「知行」（地方知行）は戦時にそなえるもの、米や金銀銭の支給は衣食を賄うため以上のものではない、との考え方（太宰春台『経済録』）があったのは留意される。

戦闘者である武士との本質を持つ大名家臣は、合戦・戦争がない時代、いかなる生き甲斐を持ち、仕事つまり藩政に従事しながら、くらししていたのか。

それは彼らの現実をめぐる実証的な検証により、ビジョンが得られよう。私の場合、自治体史の仕事のなかで用意されてきたと感じる。『新修福岡市史 資料篇近世2 家臣とくらし』（二〇一四年）では責任編集を担い、家臣たちのくらしや由緒意識について考えた。『佐賀県近世史料』では思想・文化編（二〇〇七年）や宗教編（二〇一〇年・二〇一六年・二〇一七年）の責任編集の過程で、武者の由緒や武士が持つ宗教的な思惟に分け入った。『新編大村市史』の近世編（二〇一五年）、現代・民俗編（二〇一七年）では、藩政のなかの武士の役割と民衆支配やくらし・民俗の実相を探り、藩政機構の詳細解明に挑んだ。

知行への考察を介した武士・家臣への注目のなかで、研究史で隆盛する行政的な見方とは異なる側面から、改めて、藩研究への

肉付けが可能になるのではないのかとも思う。武士への注目は再
三行われてきたのではないか、何を今更との疑心も想像するが、
最近の藩研究は武士そのものに対する関心が後景に退いている印
象をうける。それは藩研究の前進を意味しようが、藩政運営の主
体が武士であるとの視野を持つと、新たな地平もみえる気がする。
この度刊行の『藩領社会と武士意識』は、それを目指したものだ。
本来は戦闘者である武士・家臣の仁政と称されることもある行政、
つまり藩政への取り組みを改めて凝視するとともに、その展開の
なかでの「国」（藩）というアイデンティティー形成への見通しを
本書では示した。それは天皇・土族を軸とする明治近代国家誕生
の背景の一つではないのか、と考える。

歴史の動きのなかに、何を見つめるのか。ロシア・ウクライナ
戦争により世界秩序が変容しつつあるなか、些末極まりない事柄
だが、知行・武士と戦いの結びつき、「国」（藩）と「国家」（日本）
への帰属意識の関係というごとき文脈を想定する時、本書が地域
をこえて現代社会の歴史的意味の考究につながるヒントを与えて
くれるのを願う。

知行論からのささやかな展望、である。（九州大学名誉教授）

高野信治著

『藩領社会と武士意識』

A5判上製 二九六頁／定価八、八〇〇円

▼詳細27頁

ロシア帝国 仏教の偽史言説のかなた

—「兄弟」としてのミハイル・ロマノフとヌルハチ

いのうえ たけひこ
井上 岳彦

ロシア・ロマノフ朝の最初の君主ミハイル・ロマノフ。中国・清朝の前身である後金を建てたヌルハチ。一七世紀初め、奇しくも同じ頃、ユーラシアの東西に誕生した二大帝国の創始者のふたりが実は兄弟だった、「正しくは」菩薩の化身だった。そのことをついに突き止めたと世に問うた一冊の書物がある。

もちろん歴史学的にはそんなトンデモ話をしているのか。書物は何なのか。なぜそんなトンデモ話をしているのか。

書物は一九一三年にロシア帝国の首都サンクトペテルブルグで出版された。書名は『ロマノフ家に関するブツダの予言と、一九〇四年から一九〇五年の我がチベット旅行略記』（以下、『ブツダの予言』）。著者はダムボ・ウリヤノフ。カルムイク人の僧侶である。カルムイク人は、カスピ海と黒海のあいだ、大河ヴォルガの下流域に広がる草原地帯で牧畜生活を営んでいたモンゴル系民族である。彼らの多くは、ロシア帝国下にありながらチベット仏教を信仰していた。僧侶ウリヤノフが、チベット巡礼の旅から持ち帰った仏教書の中にロマノフ家についての釈迦の予言を「発見」したのは、一九〇七年のことだった。ロシアとの親交を深めようとするシャム国

王チュラロンコンから仏骨を寄贈され、須弥山を想起させる瑠璃色の花が故郷で咲くという奇瑞が続くなかでのことだ。ウリヤノフは『ブツダの予言』を書き終えるとそのまま没した。出版された一九一三年はロマノフ朝三〇〇周年を祝う記念の年にあたる。奇書『ブツダの予言』は、学界ではこれまで「荒唐無稽」な予言書とされ長く真剣に議論されることはなかった。わたし自身もその歴史的意義には長い間気づかないままであった。

当初の研究計画では、ロシア帝国というキリスト教国家のなかで誕生した仏教教団がどのような問題を抱えていたのか調べるつもりだった。しかしこれがどうもうまくいかない。裁判記録の史料がすっかり失われていたからである。裁判は帝国法と現地社会のさまざまな規範や価値がぶつかりあう場である。カルムイク人が住む草原地帯はロシア革命後のロシア内戦や第二次世界大戦の独ソ戦の戦場となり、さらに民族強制移住による自治共和国の一時的廃止によって、多くの貴重な史料が失われてしまっていた。研究の突破口となったのはドン・カルムイク人という人びとの存在だった。カルムイク人自身が少数民族なのだが、その中のさ

らに少数集団こそが民族の歴史に新たなページを刻む存在だった。少人数の彼らは主流派でないがゆえにロシア社会との繋がりを深め、ロシア陸軍に良質な軍馬を提供しロシア市場で食肉を販売することで経済的成功を収めるとともに、ロシア人から帝国や世界の動向について情報を手に入れることができた。『ブツダの予言』の作者ウリヤノフは、まさにこの少数集団の出身だったのである。

チベット仏教を信仰しているにもかかわらず、カルムイク人は聖なるチベットどころかモンゴルからも遠いカスピ海の北西（現在の地理学上はヨーロッパ）に住む。かつて彼らは中央ユーラシアの広大な草原を自由に行き来することができた。チベットにも使節団を派遣し文化的・政治的な交流が保たれていた。だが、一八世紀にロシアによって支配されるようになり、その交流が断たれる。「チベット仏教世界」とのつながりを失った寺院では、経典はあちこち破れチベット語教育も衰えつつあった。そんななか、情報と資金を得た僧侶ウリヤノフは、一八七七年、およそ百年ぶりに聖地巡礼を再開させた。ロシア帝国の存在によって失った交流をロシア社会との接近によってふたたび手にしたのである。ウリヤノフの成功は、カルムイク人たちのあいだに宗教的覚醒をもたらした熱狂の渦を生み出した。それほど人びとは聖地に強い憧れを抱いていたのである。一九〇五年、ついにウリヤノフはラサへの巡礼を果たす。そして『ブツダの予言』が生まれた。

『ブツダの予言』ではウリヤノフが「発見」した四つの予言のことが説明される。それらは釈迦とパドマサンバヴァ（チベット密教の開祖）の予言であり、それらが複雑に絡みあいながら話が展開

される。カギとなるのは仏伝に登場する二人の商人で、釈迦の成道後に食べ物を提供したことで祝福され最初の在家信者となったという逸話がある。予言によれば、二人は兄弟であり菩薩として再び現世に登場する。さらに予言の解説を進めると、なんと商人の兄（である菩薩）はロシアに、弟（である菩薩）は中国に現れ、人々を救済し新たな道に導く存在となることが判明したのである（註）。二人が現れる時は一六一三年であり、これがなんとミハイル・ロマノフがツァーリに選出された年である。つまり、ミハイル・ロマノフこそ二人の兄である菩薩の化身であり、そのあとに後金のハンとなるヌルハチが弟にあたる菩薩の化身だったので。ロシアこそ密教が発展する伝説のシャンバラ国であり、その歴代ロマノフ朝ツァーリは菩薩として人びとを救済する存在にほかならない。とりわけ、ニコライ二世はハーグ万国平和会議（一八九九年）を世界に提唱し、菩薩王として人類に対する平等公平な慈悲を示しているのだ。

実はチベット巡礼旅行でウリヤノフは大切な仲間を道中で失い、帰国後はロシア政府から資金の使い過ぎを責められていた。巡礼の苦難はいつたい何だったのかを自問する日々のなかで、ウリヤノフは釈迦の予言を「発見」したのである。かつて清朝皇帝はチベット人・モンゴル人のあいだで文殊菩薩の化身とみなされていたが、今や清朝は西洋列強の食い物にされてしまっている。ロマノフ皇帝こそが世界の仏教徒を救う存在なのだということを僧侶ウリヤノフは遺言として残したのである。

『ウェブスター大辞典』を抱え持つ三宅良齋

—東京大学総合研究博物館蔵「三宅一族コレクション」より

西野嘉章

(東京大学名誉教授)

東京大学総合研究博物館には膨大な数の学術標本が収蔵されている。文化史系のなかで、日本近世史に関わる資料群として貴重とされているのが「三宅一族コレクション」である。三宅一族の家は現在の文京区小石川竹早町にあった。家長の良齋は、蘭医方の外科医であった。息子の秀、幼名「復一」は、外国奉行池田筑後守長発を正使とする文久三年遣欧使節団に最年少の随員として加わり、帰国後、横浜運上所附属英語学校で英語を学んでいる。教師としてそこにいた宣教師ジェームズ・カーティス・ヘボンから米国人医師を紹介され、本格的に医学の道に入り、やがて医家として立ち、東京医学学校校長心得から、貴族院議員にまで出世街道を上り詰める。「医学博士」第一号の名誉に浴したのも秀であった。秀の息子の鉦一、さらには孫の仁まで、三代に亘って東大医学部教授の任を担ったのが三宅一族である。江戸後期に医家一門として知られた桂川家にも比肩し得る、近代日本の医家であった。

三宅家が、震災、戦災から守り抜いた四代の遺産は、東京大学

医学系研究科・医学部附属図書館を経て、総合研究博物館にもたらされた。コレクションとしては、家長良齋の遺品、万延元年幕府遣外(遣米)使節団の舶載品、文久三年幕府遣欧(遣仏)使節団の舶載品、秀の外遊に伴う記念収集品他、件数にして三二五件。同時代の貴顕、学者、文化人らと取り交わした書簡だけでも五〇〇〇点に上り、コレクション総体では一万点を優に超える。

良齋は天保元年から八年間、佐賀藩御側医師檜崎栄建の許で外科学を学んでいる。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの「鳴滝塾」に寄宿していたこともあり、蘭(独)人が再来日し、文久元年の江戸参府のさいには、横浜ないし日本橋の蘭人宿で、久闊を叙す機会をもったようである。恩師を前に自慢の鉦物コレクションを披露したところ、同定のためしばらく預からせて欲しいと言われ、すべてを預けた。ところが、いつこうに戻ってこない。そうこうするうちに、シーボルトは離日してしまった。そこで良齋は、息子の「復一」が欧州へ赴く機会に恵まれたのを幸いに、自



「三宅良斎写真」(東京大学総合研究博物館蔵「三宅一族コレクション」より)

分の鉱物コレクションを取り返してくるよう命じた。秀の回想するところによると、滞仏中にシーボルトと会い、良斎から言われるままに返却を求めた。すると数年して、標本箱に入った鉱物コレクションが公使館ルートを通じて送られてきたという。返送さ

れてきたものは、同封された手書きのリストから、すべて欧州産であることがわかる。良斎の預けた日本産標本は、結局、返されなかったのである。

数多ある紙史料のなかにも興味深いものがある。パリのリヴォリ―街二四番地にあり、欧州大陸初の英書専門店として知られていたガリニャーニ書店が、一八六四年一月一日付けで発行した「田辺太一宛書籍代金勘定書」である。これによると、児童教育書、標準講読本、英文法入門、英文法作文、世界地理、標準地理学、近代史、大英帝国、算術、自然哲学、野外教練、そして『ウェブスター大辞典』など、書目数にして二七種の英書を、五部ないし一〇部という単位で、総計一九〇冊もまとめ買いしていたことがわかるからである。使節団がパリを離れたのは五月のことであった。したがって、書籍の送り状は、帰国前に組頭の田辺が注文しておいたものを、ガリニャーニ書店が取り纏め、発送するさい、荷物に同梱されていたものと考えられる。

「三宅コレクション」のなかにも、おそ

らく通詞中濱萬次郎が撮影したものであろうと考えられる、「三宅良斎」のガラス湿板写真が残されている。幕末期ということ、板ガラスから革貼りの化粧ケースまで、すべてを輸入品に頼らざるを得なかった時期のものである。像主の良斎は、江戸での開業後、下総佐倉藩の医師を務めたのち、幕府医学所の教授となり、東京医学校の前身である幕府種痘所の発起人にもなっている。慶応四年に五一歳で没していることからすると、四〇代半ば過ぎの姿ということになる。正装した良斎が大事そうに抱え持っているのが『ウェブスター大辞典』である。語彙にして数十万項目を誇る大辞典は、一八〇〇頁に及ぼうかという大冊で、束厚が一〇センチもあった。良斎の手にするものが、パリで購入された書籍類のなかの一冊だったのかどうか、確証はない。万延元年に、日米修好通商条約批准書交換のため、勝海舟を船頭とする咸臨丸が、米國へ遣わされたことはよく知られる。その第一次遣米使節の一員であった福沢諭吉もまた、先輩の萬次郎に薦められ『ウェブスター大辞典』を購入し、それを持ち帰っている。良斎は萬次郎と親しい関係にあった。そのため米國経由でもたらされた辞典の可能性もまた、一概に否定できないからである。もともと、留錨つき豚革装という、写真に記録された本の外装は、欧州風のものとして間違いないのであるが。

『ウェブスター大辞典』の出版歴を繙くと、一八四一年に増補改訂された第二版の、一八五九年印行本と推定される。幕末の洋学者にとって英語の大辞典は、貴重な「知の宝庫」であったに違いない。

JPタワー学術文化総合ミュージアム インターメディアテック

【所在地】

〒100-7003
東京都千代田区丸の内2-7-2 KITTE 2・3階
TEL：(ハローダイヤル)050-5541-8600
ホームページ <http://www.intermediatheque.jp/>

【交通アクセス】

JR「東京駅」丸の内南口から徒歩1分／丸ノ内線東京駅地下道より直結
千代田線「二重橋前駅」(4番出口)より徒歩2分

【開館時間】

11:00-18:00(金・土は20時まで開館)

【休館日】

月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日休館)、年末年始、その他館が定める日

【展覧会】

「幻」人紀行—ユウラシア蒐集録」
会期:2023年6月27日(火)~10月29日(日)
「アヴェス・ヤポニカエ(9)—表現のダイヴァーシティ」
会期:2023年8月12日(土)~11月3日(金)

【入館料】

無料

東京大学総合研究博物館

【所在地】

〒113-0033
東京都文京区本郷7-3-1 東京大学本郷キャンパス内
TEL：(ハローダイヤル)050-5541-8600
FAX：03-5841-8451
ホームページ <https://www.um-u.tokyo.ac.jp/>

【交通アクセス】

地下鉄丸の内線「本郷三丁目」駅より徒歩6分
地下鉄大江戸線「本郷三丁目」駅より徒歩3分

【開館時間】

10:00-17:00

【休館日】

土日祝、年末年始、その他館が定める日

【入館料】

無料(団体・グループでの見学は要申込)

▼『法隆寺史 中 近世』が刊行しました。上巻で扱った古代・中世に比べると、まだまだ研究が手薄な時代ですが、豊臣から徳川への政権移行への対応、江戸幕府代官との関係、畿内や江戸で行われたご開帳など、注目すべき話題が満載です。

▼『ていつたいむ』には『撰関・院政期研究を読みなおす』の編者2名による対談を収録しました。古代・中世の移行期にあたり、双方の研究者によって新たな事実が積み上げられている一方で、近年は「論争」がなく、いわゆる戦後歴史学に見られたような「通説」やわかりやすいストーリーは形成されていないように見えます。日本史上重要な画期でありながら、外から見ると状況を把握しにくく新規参入しづらい時代を活性化すべく、論集に込めた想いを語っていただきました。

▼『万博学／Expo-logy』第2号では、創刊号に続き戦後の万博を取りあげます。特集は「万博と冷戦」。戦後とごえはEXPO70一色の従来の万博論とは一味違った最新の万博研究をお届けします。

▼この秋は多くの学会が対面で実施されるようです。弊社も日本史研究会等いくつかの学会に出店予定です。今年の夏・秋は右以外にも多くの力作が揃いました。ぜひお手に取ってご覧ください。

▼女性の歴史に関わる本を製作中。清水翔太郎『近世大名家の婚姻と妻妾制』、思文閣人文叢書第2弾・館野まりみ『女かぶき図の研究(仮)』。中世日本研究所編『無外如大尼(仮)』。乞うご期待。

▼所謂「奇書」とよばれる本を読みました。目は文字を追っているのに、文章の意味がわからないという初体験。なにに読後に感じるの、東南アジアの伝統音楽のような謎の耽溺感。はまりそうです。

▼入社して四か月。約一時間半をかけて奈良から通っていますが、ついに引越しが決まりました。盆地特有の暑さには多少慣れていても、道行く人の多さには慣れないままです。

▼電子書籍発行後、初めて売上を確認すると自分の購入分だけしか出てこなくてどうしようと思いましたが、やがてぼつぼつと売上が安定的な発行点数も必要ですが、とりあえず安堵。

▼表紙図版・表紙図版・平安神宮時代祭行列の図／『風俗画報』94号、1895年／高木博志編『近代京都と文化』より

『鴨東通信』は年2回(春・秋)刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.117

2023(令和5)年9月20日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

https://www.shibunkaku.co.jp/

publishing/

表紙デザイン HON DESIGN

長村祥知（富山大学講師） 編著

龍光院本 承久記絵巻

4月刊行

A5判上製横長・三二〇頁(影印カラー一八四頁)／定価 一〇、四五〇円

二〇二〇年、およそ八〇年ぶりに再発見された『承久記絵巻』、待望の公刊。本書は、全六巻の絵図全容をカラーページで紹介するとともに、『承久記』流布本系統を平仮名にした本文の翻刻および解題を収録する。絵画史料として貴重な北条義時の肖像などを盛り込む、長らく世に出なかつた稀覯の画巻が、現代によみがえる。

河上繁樹著

装いの美術史―織りと染めが彩なす服飾美

将軍・僧侶・姫君から通人まで、日本人はどのような服を装ってきたのか。

定価 五、五〇〇円

筒井忠仁編

仏師と絵師―日本・東洋美術の制作者たち

根立研介先生退職記念論集。

仏師・絵師に焦点をあて執筆した21篇の論考。

定価 一三、二〇〇円



〔目次〕

第一部 影印

龍光院本 承久記絵巻
(巻第一〜巻第六、附属品等)

第二部 翻刻と解題

龍光院本 承久記絵巻 詞書

(巻第一〜巻第六) 翻刻

解題 『承久記絵巻』の基礎的研究

附表 (A 龍光院本 承久記絵巻 各巻の研究
細寸法 / B 慶長生活字本 『承久記』・龍光院
本 『承久記絵巻』 対照表)

第三部 関連論考

第一章 研究展望 『承久記』

―二〇一〇年九月以前

第二章 承久の乱と歴史叙述

第三章 『平安通志』と『承久軍物

語』

附 『承久記』文献一覧

河野元昭著

江戸絵画 京と江戸の美

将軍が愛した障壁画から庶民が楽しんだ浮世絵まで、江戸絵画史を縦横に読み解く34篇。

定価 一六、五〇〇円

島尾新・彬子女王・亀田和子編

写しの力―創造と継承のマトリクス

日本美術における模写の伝統をさまざまな角度から再検討する。

定価 四、四〇〇円

表示価格は税込

廣田孝（京都女子大学名誉教授）著

竹内栖鳳と高島屋——芸術と産業の接点

11月刊行

A5判上製・三〇四頁(予定)／定価 一〇、七八〇円

「何が京都画壇に近代化をもたらしたか」という問いに対して、従来の研究では、竹内栖鳳の渡欧（一九〇〇年のパリ万国博覧会）が重大な契機であったと語られてきた。本書は、高島屋史料館が保管する輸出入染織品の下絵など関連資料を駆使して、栖鳳が渡欧以前に高島屋画室において行った活動を復元し、画室における下絵制作の実践こそが栖鳳の画風を進化させ、京都画壇の近代化を導いたということを明らかにするものである。

横田香世著

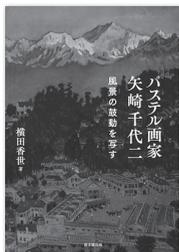
パステル画家 矢崎千代二

——風景の鼓動を写す

7月刊行

A5判上製・五八二頁／定価 一八、七〇〇円

「色の速写」と名付けた独自の画法でパステル画を描き続けた洋画家・矢崎千代二。「旅の絵師」となって世界を巡った矢崎が国内外に遺した作品からその足跡を辿り、パステルという画材を巡る小史を記す。



〔予定目次〕

序にかえて

第一章 幕末～明治初年の京都の様相

第二章 外界からの刺激と反響

第三章 ふたりの新七

第四章 芸術と産業の接点

第五章 一九〇〇年パリ万国博覧会

第六章 栖鳳の渡欧

第七章 明治四〇年以降の栖鳳と高島屋

終わりに

参考図書一覧／初出論文一覧／謝辞／著者あとがき

〔目次〕

第I部 矢崎千代二の画業

第一章 外光派の油彩画家

第二章 旅するパステル画家（一）中国からインド、そしてパリへ

第三章 旅するパステル画家（二）南米での取材を経て、東南アジア、満洲へ

第四章 旅するパステル画家（三）戦時下の晩年

附論 「肖像画五千枚」——「画職人」と「藝術家」の狭間で

第II部 パステル画法と画材

第五章 パステル画の小史

第六章 パステル画法と画材研究——「色の速写」のためのパステル改造

第七章 国産パステルの創出

第III部 北京に遺された二〇〇八点のパステル画

第八章 継承された畢生の作品群

寄贈作品一覧 中国中央美術学院所蔵／関連文献／年譜

館野まりみ著

【思文閣人文叢書】

女かぶき図の研究(仮)

12月刊行予定

A5判上製函入・二八八頁(予定)／定価 未定

阿国によって始められたかぶきは、その後、遊女たちによって模倣され、十七世紀初頭の京都を中心に地方に広がった。近世の幕開けとともに絵画史に新しい画題を提供することとなった女かぶきは、どのような意味や役割を担って描かれたのか。同時代の鑑賞者はそれをどのように捉えたのか。女かぶきの演目・芸態の発生・変遷とその経緯を整理し、女かぶきを主題とする絵画の制作意図や背景を探り、女かぶきと次世代の婦女遊楽図とのつながりを提示することを試みる。

金智慧著

明治歌舞伎史論―懐古・改良・高尚化

近世から近現代まで四百余年に至る歌舞伎史のなかで、明治期歌舞伎が占める位置を明らかにする。

定価 九、三三〇円

斉藤利彦著

【平成24年度歌舞伎学会奨励賞受賞】

近世上方歌舞伎と塚

【佛敎大学研究叢書】

元禄期以降、特に上方歌舞伎が特質を大きく転換した化政期から幕末期の実態を究明する。

定価 六、九三〇円

【予定目次】
はじめに

第一部 お国かぶきと遊女かぶき

第一章 お国かぶき

第二章 遊女かぶき

第二部 女かぶきを主要モチーフとする屏風絵
―その意義と機能

第一章 追慕・追善―京都国立博物館蔵「阿国歌舞伎図屏風」

第二章 記念／祈念・祝儀

―MOA美術館蔵「清水寺遊楽図屏風」

第三章 敬慕・追憶―出光美術館蔵「阿国歌舞伎図屏風」

第三部 女かぶきの記憶とその痕跡

第一章 懐古―MOA美術館蔵「機織図屏風」

第二章 憧憬―出光美術館蔵「楼下弾弦図屏風」

むすびにかえて

藺田稔・福原敏男編

祭礼と芸能の文化史

【神社史料研究会叢書】

神社を祭場・舞台として繰り広げられる祭礼と芸能を特集。

定価 七、一五〇円

八反裕太郎著

【第14回林屋辰三郎藝能史研究奨励賞】

描かれた祇園祭―山鉾巡行・ねりもの研究

祇園祭の山鉾巡行ならびに江戸中期に始まる神輿洗のねりものを描いた絵画作品から、その祭儀の変遷を読み解く。定価 一六、五〇〇円

表示価格は税込

稲本泰生（京都大学人文科学研究所教授）編

釈迦信仰と美術

— 作品解釈の新視点

9月刊行

A5判上製・六四〇頁／定価 一三、一〇〇円

釈迦の「生」は、いかに捉えられてきたか。仏伝（釈迦の一代記）の物語、その舞台となった聖地、釈迦関係の聖遺物などまつわる仏教徒の営為と文物の関係を、具体例に即して検証し、歴史上に位置づける。第一線の研究者13名が、釈迦イメージの形成・継承・変容の様相を横断的に浮かび上げらせ、新たな研究視点を提示する共同論集。

園城寺監修

園城寺の仏像編纂委員会編

園城寺の仏像 第五卷

南北朝く江戸彫刻篇

今秋刊行予定

A5判上製函入・約三〇〇頁／定価 一九、八〇〇円

【目次】
「釈迦信仰と美術—作品解釈の新視点」序説 稲本泰生

第I部 釈迦の生涯をたどる

— 仏伝と仏蹟巡礼の美術
いわゆる「仏陀なき仏伝図」に表現されたブツダと声聞衆（有部および大眾部）の仏身論について（外村 中）

南アジア初期仏教美術における聖地表象（富田 明）
— 仏伝図との関係を中心に
ガンダーラ地方における初期の仏伝図の探究
— ラニガト寺院址出土浮彫画像帯の分析から（内記 理）

聖地と光の幻影—女神マリーチーをめぐる（マイケル・ウイリス）
安塞大仏寺四号窟における画像構成の意義と北朝期の仏伝表象（稲本泰生）

第II部 釈迦の姿をあらわす

— 仏のかたち人のかたち
佛從何出生—ブツダイメージの中国化と三元化（若井 共二）
草座釈迦像とその儀礼
— 宋元江南仏教儀礼の中世日本への伝播西谷 功
— 休宗純實「苦行釈迦図」（京都・真珠庵）の図像的淵源（板倉聖哲）
天平様式觀の形成—日本古典美術の構築と受容（中野慎之）

第III部 釈迦の不在をこえる

— 涅槃表現の諸相
初唐期及び奈良時代の涅槃表象と涅槃觀（田中健一）
「応徳涅槃図」再考（増記 隆介）
— 原本の存在とその絵画史的位置
京都国立博物館藏釈迦金棺出現図に関する諸問題（大原嘉恵）
— 主題の観点を中心に
達磨寺所藏仏涅槃図考（谷口耕生）
— 釈迦の姿形と贊文を中心に

三井寺として親しまれている園城寺の開祖、智証大師の生誕一千二百年を記念して、園城寺および縁の寺に所蔵される仏像を網羅的に収録するシリーズ全五巻の最終巻。宝冠釈迦如来座像ほか南北朝く江戸彫刻の粹を収録。図版はすべてカラー掲載。

表示価格は税込

法隆寺編

法隆寺史 中―近世

8月刊行

A5判上製函入・カラー口絵一六頁＋本文五二八頁／

定価七、四八〇円

日本最初の世界文化遺産である法隆寺1400年におよぶ歴史を通観する、初の寺史。所蔵の数万点におよぶ膨大な文書・記録を整理し、一般に知られた古代の姿のみならず、中世から戦後にいたる法隆寺の姿をも新事実を盛り込んで明らかにする全3巻のうちの中巻（近世）。固有名詞・難字などにはふりがなを付し、引用史料は原則として読み下しとするなど、法隆寺の歴史を広く社会的な共有財産とすることをめざす。

【執筆者】藤井譲治（第一・六・八巻）、横田冬彦（第二・三巻）、法隆寺史編纂所（第四章）、鎌田道隆・法隆寺史編纂所（第五・七・九巻）

法隆寺編 【好評増刷】

法隆寺史 上―古代・中世

A5判上製函入・カラー口絵一六頁＋本文五四頁／定価七、四八〇円



【目次】

第一章 中世から近世へ

―織豊期の法隆寺―

- 一 織田信長の大和進出／二 豊臣秀吉・秀長と法隆寺／三 近世的寺領の形成／四 江戸時代の法隆寺領

第二章 江戸前期の法隆寺

- 一 江戸初期の法隆寺と龍田藩／二 寺内争論と徳川家康の寺社政策／三 寺内争論の展開と寺法の再編

第三章 法隆寺大工

- 一 豊臣秀頼による慶長大修理／二 大工頭

【目次】

- 序章 斑鳩の地理的環境と歴史的環境／第一章 聖徳太子と斑鳩宮／第二章 法隆寺の創建／第三章 西院伽藍と東院伽藍／第四章 聖徳太子信仰と子院の成立／第五章 南部の興隆と法隆寺／第六章 法隆寺の「寺中」と「寺辺」／第七章 法隆寺の中世的世界

中井正清と徳川家康／三 大坂の陣と法隆寺／四 法隆寺大工と中井役所

第四章 開帳・勸化と伽藍修復

- 一 元禄期の開帳・勸化と伽藍の修復／二 享保期以降の開帳・勸化

第五章 幕府・朝廷と法隆寺

- 一 南都奉行の巡見／二 江戸幕府と法隆寺／三 朝廷と法隆寺のつながり

第六章 年中行事と法会

- 一 年中行事／二 江戸時代の聖霊会・遠忌／三 將軍家の法会

第七章 寺院組織

- 一 学侶と堂方／二 江戸時代の景観と子院・末寺／三 学侶と堂方の確執と寺内改革

第八章 寺領と財政

- 一 法隆寺領の村々／二 寺山と岡本村・極楽寺村／三 法隆寺の財政

第九章 庶民の信仰と参詣

- 一 門前法隆寺村の発展／二 賑わう境内／三 西円堂と庶民信仰／四 名所案内記にみる法隆寺／五 法隆寺への関心の高まり／六 境内案内人の登場

索引（人名・事項）

高野信治（九州大学名誉教授）著

藩領社会と武士意識

8月刊行

A5判上製・二九六頁／定価八八〇〇円

本書は、近年の藩研究では後景に退きがちな近世武士論の必要性を強く認識し、藩研究の活況に触発されつつも、あらためて武家領主支配という観点から、大名とその家臣や、彼らによる「家」の伝記を取り上げ、著者が提唱する「藩領社会」における武士の意識をあぶり出す。

篠崎佑太（宮内庁書陵部研究員）著

近世後期の大名家格と 儀礼の政治史

今冬刊行予定

A5判上製・約三三六頁／定価二一、五五〇円

大名家格のひとつである殿席と、御目見などの殿中儀礼との関係进行分析することで、近世後期からの幕藩関係の変化を解き明かす。特に將軍家ゆかりの大名家が控える大廊下下之部屋に着目し、その政治的な意味や影響を検討。また、ペリー来航後の政治状況や、二条城・大坂城での殿中儀礼についても考察した。これらを通して、幕末期の「衰微する御威光」の実態を探る。



【目次】

- 序 大名と藩領社会
- 第一章 大名と藩政
- 第二章 藩領社会の人々とくらし
- 第三章 知行・役勤・立身
- 第四章 近世の武士と知行大名
- 第五章 近世大名家臣の役勤と人事
- 第六章 「名利」と「立身」
- 第七章 武士の自他像
- 第八章 「素隠」思想の形成
- 第九章 貝原益軒の「武」認識とその行方
- 結 政治社会と武士祭祀

【予定目次】

- 第一部 近世後期における大名殿席の展開
- 第一章 近世中期の幕藩関係と政治交渉
―福井藩松平家の家格上昇運動を事例に―
- 第二章 十八世紀後期における大名家の家格の変化―福岡藩黒田家を事例に―
- 補論 寛政期の江戸城殿中と殿席―幕府目付による「御座敷内通路」をめぐる―
- 第三章 文政・天保期における大名家の家格上昇と集団化―大廊下席大名を中心―
- 第四章 嘉永期における御家相続と家格―川越藩松平家を事例に―
- 第二部 幕末期の幕府政治と大廊下席大名の政治参加
- 第五章 嘉永期における徳川斉昭（参予）の実態と影響
- 第六章 安政四年における大廊下席大名の政治動向―「同席会議」の上申書提出をめぐる―
- 第三部 幕末期の政治と殿中儀礼
- 第七章 文久の幕政改革と諸大名の政治参加―江戸城登城と「国事周旋」
- 第八章 元治元年の二条城―殿中儀礼と幕府政治
- 第九章 慶応期大坂城における殿中儀礼

表示価格は税込

清水翔太郎（秋田大学講師）著

近世大名家の婚姻と妻妾制

二〇二四年二月刊行予定

A5判上製・二八八頁(予定)／定価九、九〇〇円

二六〇余年にわたって泰平の世が続いたとされる江戸時代において、藩祖以来直系で家を継承できた大名家の事例は皆無に等しい。大名の子の短命化により安定した継承が極めて難しくなる中、婚姻の実現と世嗣の確保は表向と奥向双方にとって重要課題となった。本書は、これまで大名・藩研究が明らかにしてきた表向の政治構造と、ジェンダー史研究が明らかにしてきた奥向の実態とを統合し、17世紀から19世紀までの史料を元に大名家における婚姻と家族構成員の実態を明らかにする。

倉本一宏編

説話研究を拓く―説話文学と歴史史料の間に

まったくの創作でもなく古記録でもない、説話はなぜ生まれ、いかに編纂され、そして伝えられたのか。 定価九、九〇〇円

倉本一宏著

『御堂関白記』の研究

『御堂関白記』について、長年、先駆的な研究を深めてきた著者による、論文からエッセイまでを蒐めたアンソロジー。 定価八、八〇〇円

無外如大尼生誕八百年記念 中世日本研究所編

『無外如大尼(仮)』

Mugai Nyodai: The Woman Who Opened Zen Gates

今秋刊行予定

B5判変型並製・四〇〇頁(予定)／予価四、四〇〇円

無学祖元の法を嗣いだ高僧・無外如大尼(一二三三～一二九八)は、後世の尼僧たちに多大な影響を与え、今なお京都の尼門跡寺院がその法灯を継いでいる。出自や人物像など不明な部分が多かった無外如大尼について、国内外の研究者による最新の研究成果を収録し、貴重な資料をカラーで多数掲載。女性史・仏教史の新たな研究成果。

前田勉著

江戸思想家の再構築

個性豊かな思想家の思想や広く流通している観念を再構成して、新たな江戸思想家の全体像を提示する。 定価 一、〇〇〇円

樋口雄彦著

明治の旧幕臣とその信仰

近代の成立期において、武士という旧身分の出身者が、思想・宗教分野でいかなる役割を果たしたのか。 定価八、八〇〇円

表示価格は税込

高木博志 (京都大学人文科学研究所教授) 編

近代京都と文化

「伝統」の再構築

9月刊行

A5判上製・六八八頁／定価 六、六〇〇円

「京舞妓」、「おもてなしの文化」、「雅な貴族文化」など、バラ色の表象がひしめく京都文化。だがこれらの京都イメージは、近現代を通じて、政治的・社会的に、近世以来の「伝統」を基にしながらも再構築し創り出された側面が強い。

本書では、近代京都をめぐるさまざまな文化を研究対象に取り上げ、その歴史的淵源を探るとともに、既存の観光言説や「京都文化」論の相対化を試みる。

丸山宏・伊從勉・高木博志編

みやこの近代

「近代の歴史都市としての京都」を論じることで、現代京都の根本問題を見通す視座を形成する。

高木博志・山田邦和編

歴史のなかの天皇陵

考古・近代の各時代に陵墓がどうあり、社会のなかでどのように変遷してきたのか、陵墓の歴史をやさしく説く。

定価 二、七五〇円

〔目次〕

序

I ロマン主義と花街

(高木博志)

1 《祇園町》の空間変容

(加藤政洋)

2 マキノ映画にみる京都の花街・舞妓表象―万国博覧会から「祇園小唄 絵日傘 第一話 舞ひの袖」(一九三〇年)へ

(富田美香)

3 戦後日本映画における島原―反ロマン主義的トポスとして

(宋下千花)

4 吉井勇と京都―「夢の女」の発見

(異国 憧憬のまなざし)

5 国画創作協会 の 成立

(中野慎之)

6 梶原緋佐子初期作品の研究

(福田彩芳子)

7 社会の底辺を生きた女性を描く

(「作品紹介」梶原緋佐子「廓美人図」一九二二―二四年頃、旧三柵楼所蔵)

II 日本主義と京都文化

7 近代京都の農民美術と民芸

(菅江智洋)

8 猪飼鳴谷と明治神宮絵画館壁画

(長志珠絵)

9 戦時下の新村出

(「襲撃洋」)

10 一九四〇年代の寿岳文章―日本主義と民主主義

(高木博志)

今尾文昭・高木博志編

世界遺産と天皇陵古墳を問う

天皇陵をめぐる諸問題を多角的に取りあげ、これからのそのあり方を考える。

定価 二、五三〇円

高木博志編

近代日本の歴史都市―古都と城下町

【オンデマンド版】

都市の歴史性、それらは実は近代化の過程で発見され、選り取られたイメージであった。

定価 一、三二〇〇円

III 京都文化の相対化

11 歴史を演じる―祝祭とページェントの近代京都

(ジョン・ブリン)

12 東本願寺と京都画壇―明治度両堂再建における障壁画制作の道程

(國岡由美子)

1413 富岡鉄斎と考槃社

(柏木知子)

境内の殺人事件―水上勉「雁の寺」と京都の裏面

(アリナ・ホルカ)

15 「加賀百万石」の記憶と京都文化

―近代金沢における都市イメージの形成 (木康宏)

IV 地域社会と京都文化

16 「教育的都立」京都の誕生

―爛熟する官立学校誘致の経験 (田中智子)

17 京都・尊攘堂における「活きた勤王」―近代京都文化を作り、支えた人びと

(池田さなえ)

18 近代京都の外国人旅行者と東山―粟田の変化と美術工芸品購入を中心に

(山本真紗子)

19 近代京都染織業と近江商人系商店

―拡大の実態と染呉服の大衆化 (北野裕子)

20 除夜の鐘と京都

―草創期ラジオとの関わりに着目して (平山昇)

21 小売市場の普及に見る生活文化の近代の変容

(和田路・中川理)

表示価格は税込

大島真理夫著

近代日本経済の自画像

「西洋」がモデルであった時代

10月刊行予定

A5判上製・五六〇頁／定価八、八〇〇円

日本にとって西洋は明治以来、二一世紀にいたるまで、自国の立ち位置を確認する比較軸Ⅱ分析モデルであった。しかし今日の世界を見渡すと、そうした時代は終焉を迎えたようである。本書は、過去一五〇年にわたる日本の自国認識の変遷を「西洋がモデルであった時代」ととらえることで見えてくるものを探ろうとする試みであり、求められる新たな自画像を地に足の着いたものにするために不可欠な基礎作業を提示する。

大阪経済大学日本経済史研究所編

歴史からみた経済と社会

日本経済史研究所開所90周年記念論文集

10月刊行予定

A5判上製・函入・一、〇〇〇頁予定／定価一七、〇五〇円

小野芳朗著

風景の近代史

誰が風景を編集するのか、そして風景は誰のものか？

定価四、九五〇円

〔予定目次〕

〔序章〕 西洋を比較軸とする
自国認識の形成

第Ⅰ部 自国認識の変遷

〔第1章〕 第一期（一八五八～一八八六年）

Ⅱ「半開国」という扇動と複数の自画像

〔第2章〕 第二期（一八八六～一九〇五年）

Ⅱ共有された「文明国」の自信

〔第3章〕 第三期（一九〇五～一九三二年）

Ⅱ「一等国」の自負心とその動搖

〔第4章〕 第四期（一九三二～一九四五年）

Ⅱ自作した「孤立国」の焦燥

〔第5章〕 第五期～第八期（一九四五～二〇〇八年）と「現代」（二〇〇八

年～現在）

Ⅱ戦後日本経済の歴史像

第Ⅱ部 自画像変遷の点描

〔第1章〕 田口卯吉の外国貿易論（第一～二期）幕末開港～明治期外国貿易の評価

〔第2章〕 日本経済史学の成立・展開と黒正蔵（第一～三期、日欧発展の並行性の認識）

〔第3章〕 一九二〇年代の猪合善一（第三期）「新自由主義」の主張

〔第4章〕 一九三〇年代の猪合善一（第四期、全体主義への転換）

〔第5章〕 遠景としての日本資本主義論争（第四期、後進性認識の深化）

〔終章〕 自画像変遷の位相

太田由佳訳、松田清注

訓読 豊後国志

〔好評増刷〕

国とは何か、地域とは何か。豊後岡藩の儒医唐橋君山は遺著「豊後国志」によって、この問いに答えた。定価七、七〇〇円

瀧井一博、アリストテア・スウェール編

明治維新と大衆文化

文明開化、それは新しい時代の「大衆」による下からの開化の幕開けでもあった――。

定価九、九〇〇円

表示価格は税込

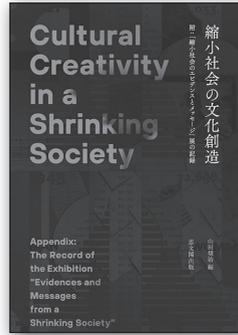
山田奨治（国際日本文化研究センター教授）編

縮小社会の文化創造

—附：「縮小社会のエビデンスとメッセージ」展の記録

8月刊行

B5判並製・二〇八頁／定価七、七〇〇円



「豊かさ」が文化を生み出してきた従来から転換し、社会が縮小する時代に人々が生み出し享受する文化とはどのようなものになるだろうか。現代の日本で新たな思想や価値につながる何かが芽生えているのか。あるいは制度や社会的な圧力によって生まれなかったものがありはしないか。国際日本文化研究センターでの共同研究会をもとに、多種多様な専門をもつ執筆陣がそれぞれの視角からの問題提起を行う。

書籍後半には、京都国際マンガミュージアムで行われた企画展「縮小社会のエビデンスとメッセージ」（2022年1月～5月）の記録として、しりあがり寿による縮小社会を考える四コマや、「縮小社会を考えるマンガ」の紹介などを収録した。

山田奨治、ジョン・ブリン編
鈴木大拙 禅を超えて大拙の活動、思想を総体として捉えることで、
「今までにない大拙像」へと挑戦する。

定価八、二五〇円

稲賀繁美編

—交易と情報流通の現在を問い直す

海賊史観からみた世界史の再構築

交易路に対する私掠、著作権・複製権への侵害など、「海賊行為」を総合的に再検討する。

定価一五、四〇〇円

堅田智子著
アレクサンダー・フオン・シーボルトと

明治日本の広報外交

日本明治の外交官としての人生を解き明かす。

定価一〇、四五〇円

川岡勉著

戦国期守護権力の研究

守護を軸にすえて、戦国期の多様な権力秩序の展開の様相をさぐる。

定価九、九〇〇円

万博学研究会編

万博学／Expo-logy

第2号

【特集 万博と冷戦】

A5判並製・二二〇頁／予価二二〇〇円

特集では、第二次世界大戦後の万国博覧会を冷戦とのかかわりで検討する。ブリュッセル（一九五八）、モントリオール（一九六七）、大阪（一九七〇）など冷戦期に開催された万博を取り上げ、「万博とは世界を映す鏡である」という万博学の立場から、万博に映った東西冷戦の時代を活写する。

万博学研究会編

万博学／Expo-logy

創刊号

【特集 植民地なき世界の万博】

A5判並製・二〇〇頁／定価二二〇〇円

佐野真由子編

万博学—万国博覧会

という、世界を把握する方法

B5判上製・五五六頁／定価九、三三〇円



【予定目次】

（特集・万博と冷戦）

一九六七年モントリオール万博に見る科学技術国家の自画像—主要国政府館の展示方針についての比較考察（有賀暢造）

アメリカ対外情報政策の延長線上の大阪万博（森口由香）

対峙と先込み—冷戦期万博における東側陣営の二重戦略（市川文彦）

「ラム」モリス・タックマンのNew Acts（辻泰忠）

冷戦と脱植民地化の接点としての万国博覧会研究（池田亮）

「インタビュ」ドバイ博日本館設計を経験して（永山哲子、聞き手 佐野真由子、岸田匡平）

天皇の儀礼空間としての博覧会—内国勸業博覧会と二つの博覧会構想に注目して（長谷川香）

図書館と万博の関係を再考する—近年の万博関連公式資料収集の進展から（陶成・藤澤剛）

「ロングエッセイ」万博資料と関わって二五年（石川敦子）

「ラム」カレンダーにみる一九七〇年大阪万博（中教弘志）

「ラム」展覧会「万博と仏教」を監修して（君島彰子）

論集『万博学—万国博覧会という世界を把握する方法』で打ち出した「万博学」という研究視角の、さらなる共有と深化をはかるため最新の研究成果を毎年発信。創刊号では戦後の万博と植民地の関係の特集。万博はいかにして現在の姿になったのかという問いに、植民地を切り口にして迫る。

万博学、それは万国博覧会という研究対象を通じて可能になる、大きな学際的人間学の営みである。

19世紀半ばに始まり、今日につづく世界最大の公式催事、本書は32本の論考で、万国博覧会のさまざまな側面に着眼し、掘り下げたその先に、人類世界の歩みを浮き彫りにする。万国博覧会とは「世界を把握する方法」なのだ。

表示価格は税込

西野嘉章（東京大学名誉教授）著

洋学誌——解剖・言語・博物

8月刊行 A5判上製・三八四頁／定価八、八〇〇円

- 〔目次〕
 〔第一章〕 西洋解剖学誌
 〔第二章〕 倭解剖学誌
 〔第三章〕 芸用解剖学誌
 〔第四章〕 洋学辞典誌
 〔第五章〕 倭本草学誌
 〔第六章〕 学術標本誌
 〔第七章〕 日仏学術交流誌
 〔補遺〕 日本近代植物学黎明期における日仏協働の実相—サヴァアティエの遺産から



幕末から明治にかけて、日本は社会の様々な分野で西欧化の実現に努めてきた。その過程において、実働部隊として活躍した人々は、多くがまだまだ曖昧模糊のままある「洋学」の体現者であった。異なる分野の境界に身を晒す、というのではない。外国語の習得に始まり、医学、薬学、動物学、植物学、農学など、数多の領野を自らの裡に丸ごと抱き込む、そうした秀才、奇才を多く輩出した時代の学問の実態、わけても書物の記述・生産法、標本の作成・保存法から窺うことのできるそれは、現代を生きるわれわれの眼に、新鮮かつ、刺激的に映る。

史料・標本のカラー図版を多数収録。博物館工学者の視点から、学術標本（モノ）を出発点とする研究方法の可能性を、あらたに提起する。

洋学史学会監修

青木歳幸／海原亮／沓澤宣賢／佐藤賢一／
イサベル・田中・ファンダーレン／松方冬子 編

洋学史研究事典

〔第34回矢数医史学賞受賞〕



- ◎グローバルな社会における洋学史研究の成果を盛り込んだ最新の研究事典。
- ◎地方史誌類の編纂事業や地域史研究の隆盛を踏まえ、全国各地に蓄積された洋学史の研究成果を収録。
- ◎研究篇（グローバル）と地域篇（ローカル）、ふたつの視点からの複眼的な編集。
- ◎各項目は1頁もしくは2頁で構成され、簡潔に研究情報を把握できる。各項目末には参考文献を収録。
- ◎歴史研究を志す若い研究者はもとより、洋学史に関心のあるすべての方へ、これからの研究の指針となる必備の書。

B5判上製・五一六頁／定価一四、三〇〇円

松本和也（神奈川大学教授）著

戦時下の〈文化〉を考える

―昭和一〇年代〈文化〉の言説分析

8月刊行

A5判上製・二六〇頁／定価二一、〇〇〇円

昭和戦前期、〈文化〉はどのように語られ、いかなる意味を担っていたのか――。

日中戦争開戦前、フランスを中心とする思想にアクセスできる文学者や哲学者にとって、〈文化〉は迫り来るファシズムに抵抗するための根拠だった。それからわずか数年、〈文化〉は多くの国民が関わり、太平洋戦争を支える旗印となっていた。本書では、この「文化の擁護」から「文化の建設」へと至る歴史的転回を、当時の膨大な言説の分析から検証した。

福島可奈子著

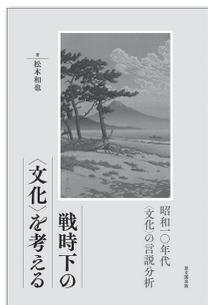
混淆する戦前の映像文化

戦前期の学校や家庭で親しまれた ―幻燈・玩具映画・小型映画「非劇場型」映像機器の実態を解き明かす。 定価九、九〇〇円

大場修編著

占領下日本の地方都市―接收された住宅、建築と都市空間

占領軍によって日本各地で行われた不動産「接收」。その都市史的意味を考える。 定価八、二五〇円



「目次」

はじめに―〈文化〉を考える

序論―戦時下、昭和一〇年代における〈文化〉

第一部 〈文化〉の通史、変遷

第一章 世界化する〈文化〉―昭和一〇年前後の文化擁護国際作家会議／知的協力国際会議

第二章 大政翼賛会文化部長・岸田國士の〈文化〉論―昭和一〇年代前半の〈文化〉言説

第三章 日本文化／大東亜文化／世界文化―昭和一〇年代後半の〈文化〉言説

第二部 〈文化〉の表徴、各論

第四章 昭和一〇年代における地方文化（運動）言説―文学（者）を軸として

第五章 〈文化〉言説のなかの「近代」、西洋文化―文化史としての「近代の超克」

第六章 太平洋戦争期の文化工作言説―南方・諸民族・大東亜共栄圏

総論―日本文化の性格

上垣外憲一編

一九三〇年代東アジアの文化交流

戦争の影で見落とされがちな当時の文化交流を、当該各国研究者の視点から論じる。 定価三、〇八〇円

松田利彦編

植民地帝国日本における知と権力

植民地支配において果たされた「知」の役割や、被支配者の「知」のあり方を考察する。 定価一六、五〇〇円

表示価格は税込

仏師快慶の研究

B4判上製函入・六〇六頁

定価 七七、〇〇〇円

◆現存するすべての快慶作品、および関連作品、総計六十三点を迫力の大判カラーで掲載

◆正面・背面・側面ほかさまざまな角度からの画像を掲載

◆X線CTスキャン画像など、最新鋭の機器による初公開情報が満載

◆像底・銘文集成、論文、作品解説など充実の内容。快慶に関わる基礎資料を網羅した、快慶研究の決定版

【内容構成】

序・凡例

図版編

- 1 弥勒菩薩像 (アメリカ ボストン美術館)
- 2 重要文化財 弥勒菩薩像 (京都 醍醐寺)
- 3 重要文化財 阿弥陀如来像 (京都 遣迎院)
- 4 重要文化財 大日如来像 (滋賀 石山寺)
- 5 国宝 阿弥陀如来および両脇侍像 (兵庫 浄土寺)
- 6 重要文化財 四天王像 (和歌山 金剛峯寺)
- 7 重要文化財 執金剛神像・深沙大将像 (和歌山 金剛峯寺)
- 8 重要文化財 孔雀明王像 (和歌山 金剛峯寺)
- 9 重要文化財 阿弥陀如来像 (兵庫 浄土寺)

- 110 重要文化財 菩薩面 (兵庫 浄土寺)
- 111 重要文化財 阿弥陀如来像 (静岡 伊豆山洪生協会)
- 121 重要文化財 如来像 (奈良 東大寺)
- 141 国宝 僧形八幡神像 (三重 新大仏寺)
- 161 重要文化財 手(アメリカ ハワード大美術館)
- 162 重要文化財 菩薩像 耳 (奈良 個人)
- 171 重要文化財 不動明王像 (奈良 東大寺)
- 181 国宝 文殊菩薩像および侍者像 (奈良 安倍文殊院)
- 191 大日如来像 (東京藝術大学)
- 201 阿弥陀如来像 (奈良 松尾寺)
- 211 重要文化財 阿弥陀如来像 (大阪 八雲蓮華寺)
- 221 重要文化財 阿弥陀如来像 (奈良 安養寺)
- 231 重要文化財 阿弥陀如来像 (奈良 西方寺)
- 241 重要文化財 阿弥陀如来像 (和歌山 遍照光院)
- 251 重要文化財 阿弥陀如来像 (京都 如意寺)
- 261 阿弥陀如来像 (京都 悲田院)
- 271 地藏菩薩像 (アメリカ メトロポリタン美術館)
- 281 重要文化財 執金剛神像・深沙大将像 (京都 金剛院)
- 301 阿弥陀如来像 (大阪 大團寺)
- 311 重要文化財 地藏菩薩像 (奈良 東大寺)
- 321 重要文化財 阿弥陀如来像 (岡山 東善院)
- 331 重要文化財 地藏菩薩像 (大阪 藤田美術館)
- 341 重要文化財 十大弟子像 (京都 大報恩寺)
- 351 重要文化財 阿弥陀如来像 (奈良 光林寺)
- 361 重要文化財 阿弥陀如来および両脇侍像 (和歌山 光臺院)
- 371 釈迦如来像 (アメリカ キンベル美術館)
- 381 阿弥陀如来像 (三重 安楽寺)
- 391 重要文化財 阿弥陀如来像 (滋賀 圓常寺)
- 401 重要文化財 阿弥陀如来像 (京都 大行寺)
- 411 重要文化財 阿弥陀如来像 (奈良 西方院)
- 421 重要文化財 金剛薩埵像 (京都 随心院)

重要作品

- 443 重要文化財 千手観音像 (京都 清水寺)
- 444 菩薩像 (京都 勝龍寺)
- 451 阿弥陀如来像 (アメリカ フリーア美術館)
- 461 阿弥陀如来像 (京都 百萬遍知恩寺)
- 471 阿弥陀如来像 (大阪 藤田美術館)
- 481 観音菩薩像・勢至菩薩像 (栃木 地藏院)
- 491 観音菩薩像 (個人)
- 501 重要文化財 金剛力士像 (京都 金剛院)
- 511 重要文化財 善導大師像 (京都 来迎寺)
- 521 不動明王像 (奈良 美穂院)
- 531 重要文化財 兜跋毘沙門天像 (奈良 青蓮院)
- 541 重要文化財 阿弥陀如来像 (石川 尾添寺)
- 551 阿弥陀如来像 (奈良 尾添寺)
- 561 阿弥陀如来像 (石川 尾添寺)
- 571 重要文化財 西大門勅額八天王像 (奈良 東大寺)
- 581 重要文化財 不動明王像 (京都 正壽院)
- 591 重要文化財 聖観音像 (奈良 東大寺)
- 601 菩薩像 (静岡 鉄舟寺)
- 611 重要文化財 阿弥陀如来像 (静岡 新光明寺)
- 621 重要文化財 阿弥陀如来像 (三重 専修寺)
- 631 重要文化財 阿弥陀如来像 (京都 極楽寺)

資料編

- 像底
- 銘文
- 像内納入品 X線CTスキャン画像
- X線透過画像
- 『南無阿弥陀仏作善集』影印・翻刻
- 古写真
- 総論 山口隆介「快慶の生涯と「如法」の仏像」
- 附論 奥孝文献
- 論文 奥 健夫「快慶と生身信仰」
- 論文 三本周作「快慶作品における金属製荘嚴具について―仏師と金工をめぐる一試論―」
- 作品解説
- 関連年表
- 掲載作品 覧
- 英文目次・序・凡例・掲載作品一覧

表示価格は税込

電子書籍のご案内

二〇二三年度より、新たに電子書籍の発行を開始いたしました。紙版とあわせて、ご愛顧いただけますと幸いです。(★は既刊)

* 主な配信ストア：Kindle 楽天 Kobo Apple Books Kinokuniya hono

井上治著

花道の思想★

花道思想の構造と、その近代における変容をみることで、日本の插花文化の背後にある思想、そして今日の插花文化の位置に迫る。

万博学研究会編

万博学／Expo-logy 創刊号★

【特集 植民地なき世界の万博】万博はいかにして現在の姿になったのかという問いに、植民地を切り口にして迫る。

万博学／Expo-logy 第二号

▼詳細32頁

【特集 万博と冷戦】東西冷戦は万博というレンズを通すとどのように映るのか。冷戦史に新たな視点を提供する。

有富純也・佐藤雄基編

摂関・院政期研究を読み直す

▼詳細表2

古代・中世の移行期の研究史を気鋭の中堅・若手研究者が独自の視点からとらえ、研究の新たな展開を見通す。

オンデマンド出版 刊行案内

前近代日本の病氣治療と呪術【オンデマンド版】今秋刊行予定

小山聡子編 A5判並製・三〇八頁／定価八、〇〇〇円

東寺執行日記 第一巻【オンデマンド版】10月刊行予定

東寺文書研究会編 A5判並製・三〇〇頁／定価一五、四〇〇円

中世禅宗の儒学学習と科学知識【オンデマンド版】

川本慎自著 A5判並製・三三〇頁／定価七、八一〇円

劇場の近代化

―帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場【オンデマンド版】

永井聡子著 A5判並製・二二八頁／定価五、〇六〇円

鳥居龍蔵の学問と世界【オンデマンド版】

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編

A5判並製・五六八頁＋カラー口絵八頁／定価一四、六三〇円

森と火の環境史―近世・近代日本の焼畑と植生【オンデマンド版】

米家泰作著 A5判並製・四〇〇頁／定価八、四七〇円

神話文学の展開―貴船神話研究序説【オンデマンド版】

三浦俊介著 A5判並製・四九四頁／定価一三、二〇〇円

御堂関白記全註釈 寛弘2年 第1期 復刻【オンデマンド版】

山中裕編 A5判並製・二〇六頁／定価六、二七〇円

表示価格は税込

思文閣グループの
逸品紹介

美の縁



今様職人尽百人一首 一冊

『今様職人尽百人一首』は、百人一首のもじり歌と当時の職人風俗百態を描いた狂歌絵本である。近藤清春作・画享保頃刊。

本書は空押し模様紺色表紙を付し、その左肩に「今様職人盡百人一首」との刷題簽（複製カ）を貼付する。柱題は「しよく人」とし、全二十五丁で首尾完存している。

内容は各半葉を上・下二段に分ち、一段ごとに百人一首の作者名ともじり歌、そしてその意を表す職人たちの姿を描いている。全二十五丁の五丁目裏ごとに「畫工 近藤助（介）五郎（良）清春筆作」との記名があり（最終二十五丁は記名なし）、初めは五丁ずつの分冊形態で出版された可能性も指摘されている。童画風の画趣が特徴で、その筆致は変化に富んだ、動きのあるユーモラスなものである。

近藤清春作のもじり百人一首としては、本書の他に「吉原百人一首」「とうけ百人一首」「江戸名所百人一首」が知られている。その伝本はいずれも極めて稀で、本書『今様職人尽百人一首』についても、二点程度の伝存を確認するのみである。その稀観性は言うまでもなく、当時の職人風俗を知る上でも、また、もじり百人一首の流行・愛好を考える上でも、資料的価値の高い逸品といえよう。

（思文閣出版古書部・中村知也）



三代東山展

— 宮永家の人々 —

2023年9月16日(土)~30日(土)

10:00~18:00 *9月18日(月・祝)休廊

思文閣

〒605-0089

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355

思文閣古書資料目録

天治本切
藤原忠家万葉集切

一枚



※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

TEL (075) 752-0005 FAX (075) 525-7155

<https://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>

kosho@shibunkaku.jp

思文閣公式 SNS



大入札会・個展情報等、随時更新中

@G_SHIBUNKAKU

SHIBUNKAKU

思文閣

自費出版のご案内

思文閣出版の自費出版レーベル

「Shibunkaku Works」

思文閣出版が培った学術書制作のノウハウを活かして、ご研究の書籍化をお手伝いいたします。詳細は小社までお問い合わせください。



京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

TEL (075) 533-6860 FAX (075) 531-0009

<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>

pub@shibunkaku.co.jp